

「和ろうそく」から見える、灯りと人と岡崎と・・・

磯部ろうそく店
磯部 亮次

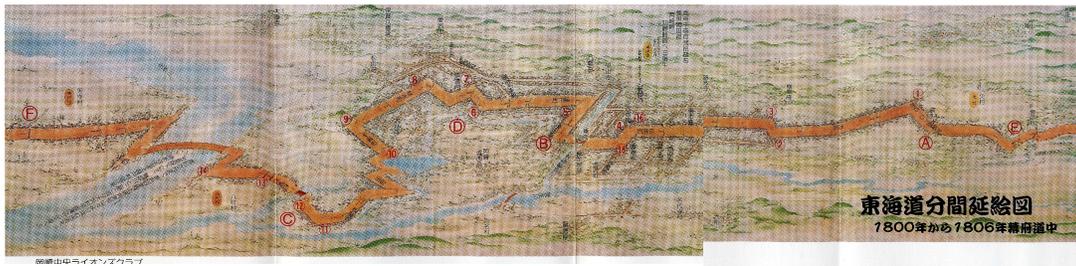


皆様、こんにちは。この天気の良い旅行日和の日に、わざわざここに足をお運び頂きまして誠にありがとうございます。皆様の前でお話をさせて頂く機会を頂き、大変光栄に思っております。何せ職人なもんですから、基本的には口べたです。言葉も知りません。お聞き苦しい点多々ありますし、表現、表情、色んな部分で皆様に「ちょっとおかしいぞ」というふうに思われるものがあるかもしれませんが、若輩者の職人ということでその辺はお許し頂きたいと思います。

今、プロフィールについては、先生からほとんどお話を頂いたので、改めて私の方から自己紹介ということも無いんですけども、今ご紹介頂いた通り八幡町と言いまして、ここから3分くらいの場所です。二七市の市がたつところが八幡町になるんですが、本町の岡信さんの真裏になります。そこで古くから和ろうそくを作っているお店、「磯部ろうそく店」の9代目ということでご紹介頂きましたが、ろうそく屋の主人をやっております磯部亮次と申します。今日は、せっかくこういう機会を頂いたので1時間しかありませんが、目一杯ボリュームを作って参りました。駆け足で1時間お話をさせて頂きます。

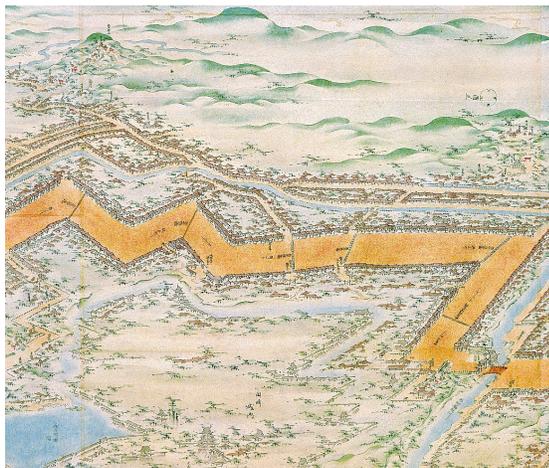
1. プロローグ

「和ろうそくから見える灯りと人と岡崎と・・・」というテーマでお話をさせて頂きます。まず沿革ですが、これ見て頂いて・・・。外で二十七曲り展をちょうど今やっていますが、その入り口のところにあった絵ですけれども、「東海道分間延絵図」と言



いまして、東京の国立博物館に所蔵されている一間を一分にした縮図絵です。1800年から1806年にかけて、道中奉行が作らせた物ですが、これが実寸の1,800分の1の図になります。ちょうどこの上に出ているところが、岡崎の二十七曲りのところの図になります。この中で、ここが城内になりますが、材木町、本町辺りの図になるんですね。これを更に拡大しますと、ここに赤い鳥居が見えます。これが本町にある清明社です。城内の北東に鬼門の位置にこの清明社がありまして、この時代、もっと昔から、江戸時代に入る前からここにずっと清明社がありました。私のところは、先ほどお話しがあり

ましたとおりで、岡崎城下の「堀端の三角屋敷のろうそく屋」ということで、実はこの堀端というのが八幡町の二七市の通りなんです。ちょうどこの清明社の、この堀を渡ったこっち側にろうそく屋がありました。ちょうどここが信濃門になるんです。ここから足助の方に抜ける飯田街道に抜けていく道なんですけれども、信濃門を出て堀端のろうそく屋でろうそく買って小田原提灯に入れて帰っていったというような、そんないわれのあるお店でございます。



これは、昭和10年の頃の八幡町の町内の通りなんですけれども、今とはだいぶ道すがらが変わっています。この黄色いところがうちのおじいさんの名前が書いてあるんですけれども、こんなふうに関口が三角形のような土地をしていた。これは昔からの名残でこんなふうになっていたようです。今、9代目ということでご紹介したんですけれども、話によると数字的にもちょっと合わないみたいで、大体15代ぐらい続いていたみたいなんです。ただ名前が判ってくる



のがずっと遡って今9代なものですから、9代ということで通させて頂いていますが、もう少し長かったように聞いています。

ろうそく屋さんの現状ということで、今全国の和ろうそく屋さんが20数軒。1都道府県に1軒無いんですね。そのうちの岡崎に3軒あるんです。愛知県には6軒あるんです。そういう意味では数割がこの愛知県にあるということで、愛知県は和ろうそくのメッカというふうに言えるかと思います。なぜ岡崎にろうそく屋さんがあるのかということですが、一番大きな理由は神社仏閣が多いということです。神社仏閣がどれくらいあるかということ、岡崎にはざっと500ヶ所あるんです。岡崎、豊田、豊橋、まあ三河の主要な都市を入れると、それだけで1,500ヶ所になります。三河一円で2,500ヶ所の神社仏閣があると言われていました。これはもう京都に匹敵するくらいの数ですね。元々この愛知、特に三河という地域は、本当に宗教心の厚い土地柄なんです。例えば、京都の東本願寺の瓦が三州瓦で普請されている。三河門徒が普請したと言われております。そして知恩院さんは当然ながら徳川の加護がありましたので、お寺さんが入られる大門には、浄土宗の紋の隣りに葵の紋があるんです。だからそういうところへ入っていく時にも、岡崎の方なら多分全く違和感なくそこに入っていける。他の土地の方はその

葵の紋を見ただけで「なんじゃこりゃ？」というふうに思うみたいなんですけれども。我々は何の気なしに、何か帰ったつもりでそこへ入っていけるぐらいのそういう土地柄でございまして、何にしても、門徒にしても、檀家にしても、この三河っていうのは本山にとっても外せない地域ということが今も続いております。そしてやっぱり徳川発祥の地ということで、色んな業種の方がここに集まっていたように聞いております。工芸品と言いますと、京都に一連の工芸品が集まっているんですけれども、それに匹敵するぐらいの職人さんが岡崎には集まっていました。それは地の利です。人と物の集まりやすい場所にあったということが言えると思います。東海道の真ん中辺り、そして長野、岐阜、そういう山から下りてくる。そういう街道が交わるのが、この愛知県になるわけなんですけれども、それプラス徳川発祥の地ということで、人と物がたくさん集まって、そこには自然に商売が成り立ち、職人さんも多かったということになるかと思えます。東海道五十三次の中で何番目が判りませんが、岡崎宿は、4番目か5番目に大きかった宿だというふうに言われているらしいですけれども。そんなことで岡崎にろうそく屋さんが今もある。今も実際にお寺の数は本当に多いもんですから、我々がやっていくことが出来るのかなというふうに思っています。岡崎の伝統工芸品に指定されているのは、三河仏壇と石灯籠ですね。石製品ですけれども。それも考えてみると宗教的な部分もあるのかなというふうに思いますし、どうしてもそういうものがこの土地のひとつの文脈みたいなものを持っているのかなと感じております。

2. 日本のあかりの歴史

日本の灯りということで、説明に入って行こうと思います。これは、ろうそくの灯りなんですけれども、とても綺麗な灯りだと思いますが。日本の灯りの歴史を辿ってみますと、縄文から室町というのは単純に木を燃やして木をくべて灯りを取っていたんですね。それが700年代以降、一部では油を使っていたんですけれども、いぬざんしょう・えごま・くそうず・つばき・くるみ・いぬがや、などから油を搾って、その油から灯りをとっていました。でもこれは、とても尊い物で、一般の方々はずっと長い間、木をくべて灯りを取っていたと言われます。ろうそくについては、仏教の伝来とともに伝えられましたが、国産されたのは1370年以降です。これはもう少し後にご説明しますが、1000年の間、特にろうそくっていう物が伝わってから、800年、900年の間、日本で作られるそういう技術が無かったんですね。これはちょっと不思議だなと思うんですけれども。その後、石油ランプ、ガス灯、電気の灯りと来るんですけれども、石油ランプが開発されてから、渡来して、電気の灯りになるまでに、実に早いスピードで灯りの道具がどんどん変わっていったんですね。木を燃やして、ろうそくを使って、ずっと来ていたのが・・・、この1860年まではずっとそんな灯りだったんです。1800年以降、電気の灯りが来るまでに、ほんの10年か20年の



間にバタバタと道具が変わっていくんですね。本当にヨーロッパの文化の発達がそのまま日本に来ているわけですが、凄いなあと感じております。

ろうそくの歴史と言いますと、まず、仏教の伝来500年代ですね、蜜ろうそくという形で日本に伝わっております。その蜜ろうそくの記述というのは一番古いものが722年になります。大安寺にあります「流記資材帳」、それに蜜ろうそくの記述が載っております。その後、松脂ろうそくという、松の脂を集めて笹で巻いたようなものを、ろうそくとして使用していきました。「木ろうそく」、いわゆる「和ろうそく」というものは1375年、「太平記」で初めて記述が出ております。大陸から伝来されたものとして載っておりますけれども、この木ろうそくは多分樫ろうではなく漆ろうという蠟を使った物になると思うんですが、また後申し上げます。そして西洋ろうそくになりますと、これが1872年に初めて国産されております。これがろうそくについての歴史でございます。

灯りを順番に説明していこうかと思えます。まず当初は、薪の灯り、いわゆる木をくべた灯りというのは一般的には家の「いろり」に直接木材を燃やした形になるんですけれども、



まつとうがい (江戸～明治時代)
[matsutogai] edo-meiji
皿状の鉄板の上に油の多い松の根などを置き燃やした。

農家では松の木を小さく割って、「ひでばち」や「まつとうがい」という道具で光を採っていました。携帯用の松明として松や檜や竹や杉の皮、そんなものを持って、束ねて背負って持ち歩きながら、火を採っていたというのがその時代になります。



ひでばち (江戸～明治時代)
[hidedachi] edo-meiji
非常に原始的な灯り方で、中に松の皮の多い根などを入れ燃やした。



少し発達しますと動植物の灯りを使うようになりました。その木の實の脂肪分を基本的



ねずみたんけい等 (江戸時代)
[nezumitankei] edo
ねずみの油タンクで、油皿の油がへると、ねずみの口から油がたれる。

に原料にしまして、ゴマや菜種やつばきやくるみ、そんな物から油を作っていました。湾岸地方では、植物の油が結構無いものですから、高いんですね。鯨油と言って魚の油を使って火を採っていました。鰯だとか鯨だとか鯨から油を採っていたんですが、やっぱり臭いんですね、動物性の物は。そんなもので点灯に使っていたのは、これ「たんころ」と言いますが、こういう道具で、油を入れて灯芯をここに付けて、火を採っていたんですけれども、そんな道具が使われておりました。

した。

これは「ねずみたんけい」と言うんですけれども、これ灯芯という火を付けるものですね。元々のい草なんですけれども、これ後また出てきますが、それに火をこうやって

ちょこっと付けているんですが、構造的には、上部が油の部分で、下部にも油が入っているんですけども、火が灯って油が段々減ってきます。油が減ると、その減った分だけ油がここからポトポトと落ちるといって、なかなか小洒落た道具なんですけれども、こういうのを「ねずみたんけい」と言います。こんな遊び心を持った灯りの道具もこの頃出来上がっています。

これは油しぼり機です。玉しぼりという搾り方をしますが、これは南京袋にその油の



元になる木の実を入れるんですね。棒でカイをしまして、この三角形の棒を横へ入れて、この木槌でポンポンポンと力を加えていくんです。そうすると力がこっちへ加わって、油が搾れるっていう。油を入れるそういう道具がここにあります。蠟を搾る時も基本的にはこれと一緒にです。これの大きい版で蠟を搾っていました。

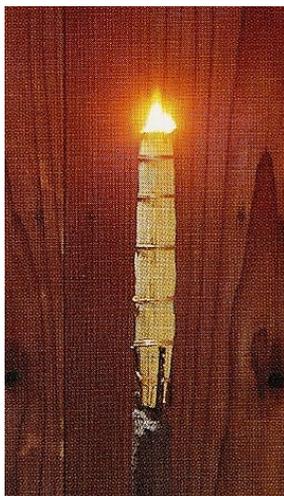
これはい草ですね。畳にある表のい草、その中の灯心草といわれる種類の、ここの芯の部分、芯というか、この皮を針で裂いて、中の中子を出すとこんな中子が出てくるんです。これが灯芯です。これを紙の紙縫に螺旋状に巻いたのがろう



そくの芯なんです、これも後またもう少し大きなものが出て来ますので、ざっとここは見ておいて頂きたいと思います。



これは、「丸形行灯」と言いまして油やろうそくにも使えるちょっと便利な。今これは油を使って火を灯しています。この皿をどかすと、ここに針が付いていて、ここにろうそくが立てれるようになっている。どっちでも灯りが採れるんですが、基本的にはやっぱりろうそくの灯りの方が明るいですね。ですので二重の、両方とも使えるような道具もこんな時代に出ています。



ろうそくの灯りになります。そうするとですね、古くからこれはあったんですけども、高価でなかなか使われませんでした。一般的には、「松脂ろうそく」と言います。これが松脂ろうそくなんですけども、松の脂に糠を塗って、それを笹で巻いたものなんです。ここがホルダー式の燭台になっていまして、ちょ



っと下から針が出て、そこに差し込むような形になるんですけども、そこに差し込ん

だろうそくに火を灯して、火を、灯りを採っていました。江戸時代どちらにせよ、ろうそくというものはとても高価なものでしたので、実際に一般の方の家庭で普及されるようになるのは、1800年代に西洋ろうそくが出来てからですね。あくまでお寺で使われたりだとか、ちょっとした庄屋さんで使われたりだとか、お金を持った方々がろうそくを使っておられましたけれどもね。



これは「がんどう」と言ひまして、今でいう懐中電灯ですね。中は二重の輪の構造になっていまして、これはどっちに向けても、ろうそくが常に上を向いた状態になっているような仕組みになっています。これが捕り物をやっている方が、懐中電灯代わりにがんどうを使っている様子なんですけれども。横のところにひとつの輪っかは留めてあるんですが、これを横にしても、皿とろうそくの重さで常に皿は下へ下へ必ず動くような仕組みになっておりますね。これは本当に大した物で、鍛冶屋さんの知恵だなと思っておりますが、こんなものが使われておりました。



これは小田原提灯です。普段は携行用に畳んであるんですね。ひょこっと伸ばすと提灯になって、大八車の前にぶら下げていくみたいな、そんな感じで使っていたわけです。



やられていた。舞台の照明としても使われておりました。

これは懐中燭台。これは旅の為のもので、一般人の旅行の時の携帯用の燭台なんですけれども、ちょっと折れてますが、この一節一節が、全部折りたためるようになっているんですね。脚が向こう側にもあって、3つ脚があるんですが、それは全部たためるようになっているんです。パタパタとたたんでおいて、これを順番に四角く折り曲げていくと、真四角の盤になってしまつて、ポケットに入れられるぐらい小っちゃなものになつちゃうんですね。そういうものを持って旅に出ていたようです。

これが、両国にある江戸東京博物館の中にある中村座の当時の模様をしたようなものなんですけれども、歌舞伎をやる際にろうそくの灯りを使って、歌舞伎を

なっていて、これはどっちに向けても、ろうそくが常に上を向いた状態になっているような仕組みになっています。これが捕り物をやっている方が、懐中電灯代わりにがんどうを使っている様子なんですけれども。横のところにひとつの輪っか



これが、両国にある江戸東京博物館の中にある中村座の当時の模様をしたようなものなんですけれども、歌舞伎をやる際にろうそくの灯りを使って、歌舞伎を

落語なんかで、真打ちという言葉 皆さん聞いたことありますね。真打ちというのは一番最後にお話をされることを真打ちと言うんですけれども、このろうそくというのが、灯っていくと段々段々ちょっとずつ芯が残っていくんですね。芯が残っていくと、火の中に芯があるものですからちょっと暗くなるんですよ。その暗くなるのを取るためにピンセットみたいなのがあって、芯の先をちょっと、すすけたところも取ってやるという作業、それを芯切りと言うんですけれども、その芯切りと言う言葉は、元々は芯打ちという言い方をしていたんです。芯を打つ。取ってしまうことを芯を打つと言っていた。落語で、一番最後に出て来られる方は、最後ご挨拶をした後にその灯りを、芯をプッと切って暗くするというので、それで真打ちという言葉が出来たというふうに聞いたことがあるんですけれども。ろうそくの灯りに因んで、そんな言葉も出来ているのかなというふうに、これも聞いた話ですからね。

その後石油の灯りやガスの灯りや電気の灯りが出てくるわけですが、石油の灯りと言いますと、日本では古くから新潟地方では臭い水と書いて「くそうず」という、そういう油を使っています。それは原油なんです。新潟では原油が採れていたんですね。それを江戸時代からランプに入れて油と同様に使っていたんですね。やっぱりそれは油煙も多かったし臭かったみたいですが、そんな歴史がある中で、その後輸入された石油ランプを使って灯されるようになって、1870年代以降、国産のランプが製造されるようになってから普通の一般の方々に普及していったという歴史があるようです。

ガスの灯りは、明治5年に横浜で初めて点灯したというふうに言われておりますが、その後、光の増量するマンテルというガラスなんですけれども、そういうものが出来てからはどんどん電気の灯りが普及して、国内、大きな都市には、ガス会社が出来て、ガスの灯りが普及していったと言われています。電気の灯りは明治11年ですね。最初に使用したのがアーク灯というものらしいんですが、かの有名なエジソンさんが、京都の竹を使ってフィラメントを作って、そのフィラメント作りが成功して電気の時代に入ってしまったといわれています。そんなところでも、京都の竹はとっても有名なんですけれども、まさかそんな時代に、そんな有名な方が京都の竹を使ってそんな道具を作っていたというのはちょっとびっくりでした。そんなのが歴史なんですけれども。最初一般用の家庭の電気というのが10ワットが1灯ぐらいしか使われていなかったです。今の灯りとは全然違う灯りのレベルだったと思います。こんな灯りが段々段々道具が変わって明るくなっていくわけですが、明るくなることによって何が生活が変わってきたのかなという、灯りの照度が明るくなることで何が変わったと思います？生活が。まず夜の時間が長く使えるようになったんですね。基本的に昔は夜になったら寝るものだったんです。それが、灯り道具がどんどん発達することによって夜の時間が長くなりました。夜仕事をするような、そういうことが時代の中で出来るようになってきています。僕がおもしろいなと思ったのは、灯りの明るさが変わってくると書物の文字の大きさが段々それにつれて小さくなってきたんですね。それこそ油で使った灯りで文字を見てい

た時には1ページに文字が二文字、三文字の大きな字がぼんぼんと書いてあって、それが何ページもあるような書物が出来ていたんです。それがろうそくの灯り、また石油の灯り、段々段々ここ近代に変わってくるに従って1ページに何行も文字が入る。フォントが段々段々小さくなって、最近ですと、あまりにも小さくなりすぎて、字が見えないものですから、新聞のフォントはまた少し大きくなってはいますが、灯りによって本の文字が段々小さくなっていった。一冊の本の情報量が増えていったというのが一番の灯りに関する生活様式の違いかなと感じておりました。

ざっと日本の灯りということでご説明させて頂いたんですけども、今写真で色々灯り道具が出ていましたが、それは「日本のあかり」という、片山光男さんが作られた本なんですけれども、そこから出典させて頂きました。こういう灯り道具というのは、日本全国色んなところで見ることがあるんですけども、特に私が有名というか、いいなあと思ったのは、一番有名なのは小布施の「日本のあかり博物館」が有名です。軽井沢からちょっと奥へ入ったところですね。でも行ったらそんなに大したことはなかったですよ。実は、一番こういう灯り道具の貯蔵が日本全国有数の貯蔵物があるというのが「蒲郡市の博物館」です。ここの学芸員の方が物凄く良く知っています。ですので灯り道具に興味があったら一回蒲郡市の博物館に行ってみられると良いです。場所はそんなに大きくないもんですから、常設展示物はそんなに多くないんですけども、持っているものは物凄く多いです。もうひとつ、由比の「東海道由比のあかり博物館」。このあかり博物館の館長さんが片山光男さんという方です。元々電業社、電気屋さんだったんですね。「おいらは電気で飯を食わしてもらったんで、それでみんなにお返しをしたい」ということで、古い道具を色々集められて、自分でこのあかり博物館を由比に造ってしまいました。ただこの人は、自分で色々体験して蠟搾りもする、油搾りもする、全部自分でやっておられるので、学芸員よりももしかしたら知っているかもしれない。このあかり博物館へ行くと、人数が揃うと、電気を落としてその当時の灯りで色々説明をしてくれるということもしてくれますので、見かけは何となく胡散臭い、怖そうなおじさんなんですけれども、お話をするととっても良い方だなというように思います。是非機会があったら由比の方まで足を運んで頂きたいと思います。

3. 和ろうそくづくりについて

ここで、いよいよろうそく作りについて皆さんにお話をさ



せて頂きます。ろうそくを作るのに大きく蠟と芯、これ灯芯なんですけれども、芯があります。蠟というのはこれ檜の木なんです。これはこ
こら辺にある檜の木なんですけれども、秋になると紅葉する、街路樹に使えるような強い木なんです。こ



それが、九州久留米市の耳納北麓地区っていうところにある1キロに渡る櫨並木なんです
 が、今、蠟が採れるのが九州産、あと一部四国産の物があるんですけども、基本的に
 九州だけです。一番蠟の出荷量が多いのは福岡県。ただ実を採って実の収穫量が一番多
 いのは熊本県なんです。その実はこんなふうに、葡萄の房み
 たいになっているんですよ。これが全部房になっているんです
 けれども。そんな葡萄の房みたいなのが、この11月から2月
 ぐらいの時期なんです。特にこの最近は年内、11月から年末
 いっぱいぐらいでこれを採って収穫をします。木の大きさとい
 うのは7メートルぐらいあります。それに長いはしごを掛けて
 ひとつひとつ全部手で取るんです。この九州の方では実を採
 ることを「ちぎる」という言い方をします。実を「ちぎる」と
 いう言い方をするんですけども、木に粘りが強いものですから、なかなかこう簡単に
 採れないんです。ひとつずつ手で採らないとなかなか採れません。そして木に傷を付
 けると、翌年以降実がならないものですから、なるべく
 木を傷ませないように人手でやっております。



これは、蠟が出来るまで、お百姓さんが蠟をちぎっ
 てくださいね。蠟屋さんがそこから買い付けをしてきて、
 順番に叩いて実を潰して、煮て、搾って、蠟にして、
 ろうそく屋さんが買うんですが。昔は九州の方が何で
 盛んかということを考えるに、江戸時代特に参勤交代

で遠隔地の方が江戸へ上って来るまでの旅費は物凄く必要だったですね。通常に田畑を
 やっているだけだとなかなかそれだけのお金を得ることが出来ない。要は遠くへ行けば
 行くほど特産品っていうものに力を入れてました。ですから海の幸だとか山の幸、そし
 てこんな蠟も九州地方の特産品だったんですね。ですので元々は大陸にあった櫨の木が
 琉球に渡って鹿児島へ入りました。鹿児島でこれは原料、良い材料になるんじゃないか
 ということで学者さんが品種改良をして、日本独自の櫨を作ってしまった。今日本
 にある櫨は海外にはありません。日本独自の物になってしまったんですね。その蠟を搾
 ってこういう灯り道具の原料にして京都や大阪や江戸へ送って、お金をどんどん儲けて
 たんですね。ですから昔蠟屋を
 やっていたところは今九州で
 は本当にお金を持っておられ
 ますね。蔵がいくつも建ってい
 るような、そんな所。今は蠟屋
 さんがほとんど無いんですけ
 れども、昔やっていというところ
 は皆んな大きなお家です。

蠟の用途というのを、ここに

図表-26 木蠟の用途

分野	品目	主なユーザー	求められる特性
化粧品	ボマード、クリーム、 チック、口紅、マユ墨	資生堂、鐘紡、柳屋、コーセー ポーラ、マンダム、メナード	粘靱性
医薬品	軟膏、硬膏、坐薬、 乳剤、外科包帯材	武田薬品、大塚製薬、大正製薬 持田製薬、佐藤製薬	安全性
光沢仕上剤	家具、皮革、自動車、 紙、菓子、繊維、ローフ	リンレイ、コロンプス、YAM AHA、山崎パン、ジョンソン	白木などのな じみ性、光沢
文具	鉛筆、カーボン筆、クレヨン クレパス、チョーク(工事現場用)	三菱鉛筆、ゼネラル、サクラク レパス、トンボ鉛筆	タッチ性 すべり性
研磨剤	ステンレス、金属	新家工業、木工加工メーカー等	すべり性
油滑剤	グリース、離型剤		
保護剤	レコード、塗料等		
その他	和ろうそく、模型 彫刻、等		

(注) 中小企業の木蠟業界ながら、大資本系のユーザーを原料供給において支えている。

(原図; KK. ノダワックス)

和ろうそくというのが、一番下に見えてはいるんですけども、和ろうそくで使われるのが最盛期の10%程度だったんです。あとの90%は化粧品、ポマードだとか口紅、そういう基材ですね。あと医薬品、軟膏だとかに使われていました。皮革製品の光沢剤や文房具のクレヨンなんていうのは蠟そのものですね。そんなものの材料に使われていました。こちら辺を見ても大手のメーカーの名前が書いてありますが、こんなものを主流に基材として使われていたんです。本当に和ろうそくに回ってくる量は少なかったんですけども、何にせよ、木蠟自体が、学識名称でジャパンワックスというように「日本の蠟」というふうの世界で通用しているんですね。ポマードの生産量というのは日本だけじゃなくて、海外で使われる量が非常に多かったんですけども、海外輸出がもう8割方ぐらい。日本で消費される量は、最盛期ですけども非常に少なかった。今はだいぶ代替品に変わってパラフィンなんかそういうものになってきているので、消費量自体も生産量自体も本当に減ってきています。



芯ですが、これ下に畳があるんで判りやすい、畳と同じもので、これい草ですね。い草の皮を針で裂くとズイが出て来ます。これが灯芯です。立っているのがろうそくの芯です。紙のコヨリがありまして、灯芯を順番に螺旋状に巻いてあります。何となくキラキラと光っている部分が見えると思うんですけども、これ真綿なんですけど、芯がとっても柔らかくて、すぐはち切れちゃうものですから、それを真綿で止めてはち切れないようにしてあります。こちら辺にちょっと真綿のそのキラキラというのが見えるんですけど、そんなふうにして芯を作っています。



これが仕事場の写真です。こういう箱のことを舟っという言い方をしています。この舟も先々代から使っている舟で、明治後半から大正時代に作られた舟なんですけど、それをずっと使っています。



これ串なんです。ろうそくの大きさによって全部串のサイズが違います。古い物は江戸末期の道具がこの中に幾つもあります。これは大きなろうそくを作るための太い串なんですけども、桜が使っているんですけど、一般的に小さいものを作る時は、これ小串って言いますが、全部竹で出来ています。現在真ん丸の串を作ってくれる技術がなかなか無いんですね。作ってもらうととっても高いですし、どこへ頼めば良いのか分からないような状況なんです。昔は籤屋さん



があって、着物なんかでそういう竹籤を使って居たんでこういう技術がどこにでもあって・・・。一節で何十センチかの串を作っていくのですが、その竹が今はなかなか採れないような状況ですけども。これ串に芯を刺した状態の物。串だけでも今何万本と家にあります。多分家が持っている串の量というのは日本一じゃないかというぐらい串がお陰様で残っています。店は戦災で実際に焼けてしまっているんですけども、お祖父

図表-30 蠟燭の歴史

元号	西暦	事項
	BC.300頃	●既に蠟燭がエジプトに存在したと考えられる。 ●東洋(中国)に於いても、漢の高祖の時代に閩越(福建省)王が、蜜燭200枚を献品したと西京雜記に記されている。 ●河南省洛陽縣金村の墳墓から、戦国末期のものと思われる青銅製の燭台が発見されている。
	538	仏教伝来とほぼ同時に蠟燭もたらされた。
皇極記	710~794	蠟燭が宮廷や寺院で用いられる。
集書目	722	大安寺流記資財帳に蜜蠟燭の記述あり。
寛平6	894	遣唐使が廃止されると松やに蠟燭の製法が発達してくる。交通が再開されると木蠟燭(和蠟燭)が回復。
源朝	1350	幕府絵詞に燭台の記述あり。
徳川記	1375	太平記に木蠟燭の記述がある。
徳川-享和 年間	1531~ 1570	木蠟燭(和蠟燭)の製法により、日本で初めて国産蠟燭が登場
享和年間	1573~ 1591	博多の商人、神屋宗湛、鳥井宗室、中国より蠟燭を得て肥前国に栽培の伝。
正保2	1645	支那船、薩摩の桜島に漂着し、蠟の種及び製蠟器を伝う。
明暦4	1658	台提灯が出回る。
享和年間	1673 1681	一説には、この頃に支那船は桜島に漂着という。
寛政より 元文5	1673~ 1740	諸国、蠟の実益を覚えて、蠟栽培を奨励。 つらあかりが普及する。
文化8	1811	シュプルー(仏)が油脂の成分を研究し、ステアリン蠟燭と石けんとの工業に基礎をひらいた。
文政元	1818	ブラコノー・シナモンによって、初めてステアリン蠟燭を製造する。
天保1	1830	パラフィン蠟燭が作られる。
万延元	1860	フェラデーによるクリスマス講義「ろうそくの科学」行われる。
明治5	1872	西洋蠟燭が国産化される。
大正元	1912	真島利行がウルシオール構造決定と合成による確認。

さんが阿知波の方へ疎開していきまして、道具は全部持って疎開をしたんですね。ですので戦後すぐからその道具を持って帰って来て仕事が出来ようになったということです。今家がろうそく屋をやっているのは間違いなくお祖父さんのお陰です。実際に手で蠟を塗って、こんなふうに塗



っているんですね。一重づつ一重づつ塗っては乾かし、塗っては乾かしで太くしていきます。こんなふうにしてろうそくを作っています。これ20匁か30匁ぐらいの大きさの蠟なんですけれども。これさっきの歴史的な部分をちょっとのつけたものですね。

これが亡くなった父と一緒にやった仕事なんです、1メートルぐらいあるろうそくなんです。日本一のろうそくというのを作らせて頂きました。耳納北麓地区の檜並木の實を使ってろうそくを作りたいんだというお話がありまして、約4ヶ月掛けてこれを作りました。専門家の方々から言わせると絶対無理だって言われていたんですね。自重で潰れてしまうと。蠟自体が、若干柔らかいという



か粘りがあるものですから、どっちかに傾き始めると絶対自重で潰れちゃうから無理だと言われていたんですけども。何とか今も、久留米に行くとこれが残って飾って頂いております。

ろうそく、一般的に和ろうそくの他に最近はこの絵ろうそくも作って、ろうそくへの入り口というか、使って頂かないとろうそくの良さってなかなか伝わらないので、何でも良いから使ってもらう為に、絵を描いたりすることで、「絵が綺麗ね」って、このろうそくを買って頂いて、その先に火を灯すということも有りなのかなというふうに、ここ15年ぐらいやってきましたが、最近はとても人気があって、海外のお土産で使って頂いたりしているんです。



4. ろうそくの灯りについて

実際にろうそくを使った感じってどんなんだろうっていうのが、これろうそく、ろうそくの灯りだけのぼんやりとした灯りですね。実際に見ていると安らいでいっちゃう、眠くなっちゃう



ようなんですけれども、もう今はなくなってしまった名鉄岡崎ホテルの八祥さんというところで、こんなふうにお庭を作らせて頂いて、竹灯りのお庭ですね、夜だけこんなふうな演出をさせて頂いた時期が、終わりがけにちょっとだけですけどもありました。これ綺麗なんですけれども、奈良の浮見堂なんです。これ猿沢の池の辺りなんです。これ若草山のところ。これ今年で第10回になりましたが、奈良で、8月の頭からお盆まで2週間ぐらい、ろうそくの灯りだけのイベントをやっています。「なら燈花会」という。2万本ぐらいのろうそくに火を付けて、ろうそく灯りだけで町を散策出来るようになっていきます。その2週間ぐらいで大体80万人ぐらい今お客様がみえるそうです。今ではなくてはならない行事になったんですけども。私もこういうろうそくの灯りを見てもらえるチャンスが最近本当になくなったなと思っています。



人間は、元々進化論では、とにかく火が使えるようになってきてから人間になれたのかなというふうに考えられます。そんな部分では火を見て心は必



ず反応するんだらうなと思います。でも今家庭でもそうですけれども、コンロも電気になってしまって、実際に火を見ることはなくなってきました。ましてや火を使えることが子供達に出来なくなってきています。本質的な部分ではやっぱり火を見て、何かを感じるということは人間は必要じゃないかというのは常々感じております。最近の研究によると、炎、ろうそくの炎から「f分の1のゆらぎ」って言うんですけれども、人間の心を安定させるようなゆらぎ、波長がその中にはあると言われていまして、ろうそくの灯りを見ているだけで脳の中に波が出てきて心が落ち着くと言われてます。時々異常な方がみえて、付け火をしてそれを楽しんでぼんぼん元気になっちゃう人も居るんですけれども。普通の方はそれを見て心が安定するって言われています。生活様式の中にろうそくを使ってもらえる機会があると良いなというふうに今は思っています。

5. 伝統工芸を残して行く使命とは

あと、私の経歴とこれからのことをお話をしていきたいんですけれども。私がこの自分のところへ戻ったのは、元々父の病気が原因で戻ってまいりました。私、今45歳です。戻って来た時は26歳です。59歳で心筋梗塞で父が倒れ、その後脳溢血などを起こし、ずっと闘病生活の中で、2005年に父が亡くなりましたが、その頃後遺症は多少はあったんですけれども、何とか頑張ってリハビリをしながら、ろうそく作りは亡くなるまでしてくれていたんです。そういう中で、私も大手の会社に行っていたんです。次男坊なんです、実は。何で跡を取ったのと良く言われるんですけれども、大手の会社というのは自分は居なくても代わりの人間は幾らでも居るんですね。そういうシステムになっているんです会社っていうところは、大手は、中小零細になるとやっぱり代わりが居ないんですね。誰か継がないと、誰かやらないと代わりは居ない。それだけで戻ってきました。良い子だったと思います、あの頃の僕は。今はどうだか判りませんが。戻って来たらとってもとっても大変だったんですね。経営の仕方ひとつ、本当にお父ちゃんお母ちゃんがやっているような商売ですから、こんなに良いのって思いながら、流通っていうのは物凄く不安定な世界でした。特に怖いのが、原料の入手がなかなかままならないんですね。原料は九州の方から取るんですけれども、ちょうど私が戻って来たのが平成元年なんです。平成3年か4年に、台風19号って九州に上陸した台風がですね、日本海を通過して青森に再上陸してリンゴを落としてしまって、リンゴが物凄いその時取れなくて、高騰したっていう台風だったんですけれども、実はその時に九州で櫛がなぎ倒されているんです。その年は櫛蠟の出荷量がゼロだったんですね。蠟が無いとなるとろうそくが出来ないわけですよ。どうしようかというので、その蠟を集めに血眼になって当時探し回りました。その時に初めて九州へ渡って蠟屋さんとも渡り合ったんですが、当時はまだ大阪の間屋さんを通じて蠟の購入も出来ていたんですけれど、間屋さんが私のところへ来て「無い物は無いんだと」間屋さんは言い切って。「じゃああなたはもう私にとっていない人だから、もうあなたとは付き合わない」って。それで、蠟さんのところへ直接お話をするようになったです。蠟さんが言われたのは、その当時そこ

の社長さんが75歳だったんですけれども、生まれて初めてろうそく屋さんを見たと
言われたんですね。長い歴史の中で、問屋の流通機構がしっかり出来上がっているの
で、ユーザーが直接(蠟屋さんから言うとエンドユーザーです)その現場へ来て、あれやこ
れや言うなんてシステムは無かったらしいんです。木訥な75歳のおじいさんが、僕が
行ってもなかなか喋ってくれないんですよ。でも一生懸命お願いして、そんなことを何
日も何日も繰り返してお付き合いをして頂いて、そのおじいさんはまだお元気なん
ですけども、今行くと歓待して下さって焼酎飲ませてくれるんです。そういう努力を順
番にしてきました。福岡、熊本、鹿児島、大分、各県回って蠟屋さんに頭を下げるとい
うか顔出しをし、ついでに各自治体に回って、この蠟燭がお宅の土地の歴史にとってどん
だけ重要だったかということを書いて、そんなことを若造の分際で随分やらせてもら
いました。ただその後各地区で八女だとか久留米だとか耳納北麓、それから水俣だ
とか、そんなところで蠟を使った町おこしというのを(未だに)その頃からやって下さ
っています。そういうことから考えていくと我々からいうと蠟を安定的に回してもら
いたいだけの、それだけで回っていたんですけれども、少しはその土地のプラスになっ
ていったのかなというふうに思います。けれども、その後も雲仙普賢岳の噴火で、長崎の
その下に蠟の団地があったんですけれども、そこもやられてしまって、危機的状況がど
んどんどんどん続いて行ったんですけれども、お陰様で自分達のそういう活動、他のろ
うそく屋さんをちょっと巻き込みながら一緒に地元の人に掛け合って行ったお陰で、今
は何とか復興して我々が使う分くらいは何とか回してもらえるようになっていま
す。ただこれもギリギリで、ろうそく屋さんは全国で二十数軒です。ここからろうそく
屋さんが減っていったら、蠟屋さんは飯が食えなくなっちゃうんで、蠟を作るのを
辞めてしまいます。だから技術が残っても原料が手に入れられなくて、ろうそく屋
を辞めないといけない時がそんなに遠くない時期に来ちゃうのかなというのを今考
えながら、感じながら仕事をしているのが現状です。

通産省にも行って助けてくれって話をしたんです。伝産、伝統的工芸品を守る法律
というのがあって、伝統的工芸品に指定されると後継者育成だとか原材料の確保とい
うのに物凄く投資をして下さいます。そんな部分で何かうちもやってもらえるん
じゃないかと思って、何も法律も知らない時に通産省に行ってお話をしたら、「磯部
さんね、ひとりでここへ来てもらっても困るんだ。せめて10人ぐらいで来て
もらって、陳情って言うんだけど・・・。」そんな説明からして頂いて、要は
あんたのことを守ってあげることが出来ない、落ち穂拾いは出来ない。自分達
も数があって自分達の自助努力で何とか残っていければ国は投資するんだと。
そこからこぼれてしまったところは申し訳ないけれども自分達で何とかして
もらうしかないねという言われ方をされました。それでも、そんな冷たい
ことではなく、その後ここへ行って、あそこへ行って、こんな相談をする
といいよということ色々示唆頂きまして、その後伝産協会という協会がある
ということも知りましたし、愛知県にそういう伝統工芸品を支援する課がある
ということも知りましたし、その後岡崎市の商工労政課がそういうことに携

わっているということも知りましたし、そんな動きをしていく中で、色々覚えさせて頂いて、色んな人に助けられたなあと感じております。

これから、どんどん大変な時代に入っていくというのをまさに今感じているんですけども、そんな中でもこれから我々がやっていく使命は何かというふうに思うと、まづろうそく屋さんが全国で20軒で、その人達が一緒になって声を上げてもなかなか残していけるものではない。そんな中で何を考えて来たかという、もう少しくりを大きくして工芸品を扱っている人達。同じような悩みがあるんじゃないかということで、仲間を作って、一緒に勉強をしながら考えて行かないといけないかなと思うようになりました。もうひとつは「伝統工芸品」という言葉。伝統工芸品というのは作り手側の何かちょっと偉そうな部分だと思うんですね。世間の人知らないものを幾ら伝統工芸品と言ったって判らないわけですよ。私も催事で、結構実演をやりながら実演販売というのを頼まれてやっていたんですけども、65歳のおばさんが、「生まれて初めて和ろうそくを見た」というんですね。「こんなの見たこと無い。新しいろうそくなの」と言うわけです。それが伝統工芸品と言われるものの実態だと思います。ですので、もう一度みんなに知って頂く為に新しい販売チャンスを、自分達で作っていかないといいないというのは感じています。

6. ING「今、そして、未来」

僕らの仕事は時代に淘汰されていってしまうものなのか、これから残っていけるものなのか、全然判りません。その判らない中でやっていかないといいないというふうには思っているんですけども、間違いなく絶滅危惧種です、我々は。でも、減ると変な意味で希少価値って出るんですね。今は色んなところでご覧頂いているんですけども、その希少価値の中に僕はひとつ歴史的なそういう価値っていうのがあるんじゃないかなと思っています。これは和ろうそくということだけではないんですけども、岡崎の色んな業種、今、匠の会というものを作ってというご紹介を頂いたんですけども、石屋さんや味噌屋さんやろうそく屋や花火屋さんや太鼓屋さん、今42人、26業種の方が「おかざき匠の会」に入っているんですけども。色んな業種、多種多様の方が居て、同じ様な悩みをみんな抱えているんですね。そういうところで一生懸命勉強しながら、歴史的な部分のところで価値が残っていけば、岡崎に残していける意味が出来れば、残っていける可能性もあるなというふうに今思っています。

岡崎というのは本当に歴史的な史跡というのが多くて、やっぱり徳川さんありきで、そのお寺が多いっていうそんなこともいっぱいあるんですけども、本当に整備されていないんですね。もったいないぐらいです。これは、テレビもまわっているんで言いたくない。ちょっと行政を何かいらんこと言っちゃうことになると思うんですけども、もう少し考えれば良いのになって、本当に常に思っています。保母の方ってみえますか？美合のちょっと山の方に行った岡町のちょっと奥に保母町というところが。そこに勝鬘皇寺さんという小さなお寺があるんですよ。勝鬘皇寺さん、本願寺さんなんですけ

れども、その勝鬘皇寺さんって本当に小さな、一見見ると荒れ寺かなと思うぐらいのお寺なんです。実は歴史的には物凄い古いお寺で、要は聖徳太子由来のお寺なんです。聖徳太子絵伝という四幅の掛け軸があるんです。それは文化財になっていて、東京国立博物館で全部学芸員の方を通じて、手直しをしてもらって、今はそこにあるはずなんですけれども。絵伝のおとき話を僕も聞いたことがあるんですが、凄い絵だなと思いました。そんな小さなお寺にもそんなお宝が。岡崎のお寺って結構ごろごろお宝を持っているんです。全然出て来ないんですけれどもね。でもそんなのがですね、すぐお隣りのお寺にも結構あるんです。そういうものを引っ張り出すだけでも凄い観光資源になるというふうに、安直に私なんかは思っているんですけれども。そんな部分では、そういうものをもっと活用してもらおうような動きに挑戦していただかないといけないし、僕らもそういうところにどうやって関わっていくのか考えていかなければなりません。

それは言葉で言うと産業観光っていう言い方になるんですけれども、今一番上手にやられているのは八丁味噌さんなんですね。本当に八丁味噌を作る工程を見たくて皆さん来られます。ついでにお土産も買って行って下さいます。一挙両得なんですけれども。でもあれは本当は民間でやっているんですけれども、民間があれだけの力を持っている、そういう業種って無いです。それをどういうふうにして、見せれる情景を作っていくかというだけでも、結構市外の方達が来てくれるような場所になっていくのかなというふうに思っています。岡崎城もあるわけですが、「岡崎のランドマークって何？」って若い子達に聞くと、「イオンだ」と言うんですね。岡崎の象徴がイオンですよ。ちょっと待ってよって。やっぱり我々45歳の年代でも岡崎のランドマークはお城でしょうと言いたいです。そういうふうには言わないのは何故かという、僕らは昔康生へ行くことを岡崎に行くって言って、そういう時代の人達、皆さんもそうだと思いますけれども、そういう時代に育ってあそこでボートに乗ったなんていう人がここにいっぱいみえると思うんですけれども。今の子達はそういうことを知らないです。岡崎のお城を中心とした公園をもっともっと整備すべきだと思います。そういう中に歴史的な施設をもっと作れば良いのになって、文化庁の持ち物だから出来ないっていう言い方をされるんですけれども、文化庁からそれじゃあ返して貰えばいいじゃないって思っています。一号線も地下に埋めてとギャラリー一会の社長も言われていましたけれども、僕も昔から大賛成。埋めちゃって、全部公園にして、「Libra」まで全部緑の公園の中。ここに住んでいる人達はみんな公園の中に家がある。格好良いですよ。でもそんなふうにするとまた人が集まって来るだろうし、人が集まるにつれて店も出てくるだろうと思います。中心市街地活性化なんていう言い方をしていますけれども、一回つぶしちゃうしかないなというふうに思っても、まあこんなこと言っちゃあ駄目ですけども。そんなふうには思っています。本当にその史跡を上手に使ってもらえることで伝産が残っていくチャンスが新しくもう一回再発見されるんじゃないかなというふうに今思っています。

100万人のキャンドルナイトって知っていますか？。夏至に2時間だけ電灯を消しま

しょうという運動が2003年から起こっています。元々は、ブッシュ大統領がカナダで1ヶ月ごとに原発を造るという計画を立てた時に、カナダ人の方々がみんな電気をともさない自主停電運動を起こしてですね、それは環境問題にそこから発展して、日本では、それがキャンドルナイトになったんですけれども、実際に電気を消して環境にもやさしいそういう時を過ごしましょうということなんですけれども、うちもそこに関わらせて頂いて、一番最初からそのキャンドルナイトの呼びかけ人から頼まれて最初の公式ビデオにそのろうそく作りがのっているんですね。やっぱり物凄くそういうのが大事だなというふうに思います。マスメディアにも色々載せて頂いておるんですけれども、私が戻ってきた20年前には和ろうそくという言葉って意外とみんな知らなかったんですよ。和ろうそくって本当に何っていう世界だったんです。ここ20年で随分和ろうそくという言葉を知ってくれました。見てくれる人が多くなりました。これは業界的には本当に異常なぐらい稀なことです。皆さんもご存知だと思いますがNHKの「さくら」という番組で和ろうそく作りの三嶋屋さん、飛騨古川なんですけれども、その三嶋さんがバーンと出てくれて我々も物凄く助かったんですけれども、でもそういうことって物凄く大切だなと思います。我々がやれないことをマスメディアの力を借りて、みんなに伝えてもらうことで、少しでもそこでも生き残りができていけるのかなと。その為には自分がどういう人間になるうが何だろうが、ちょっと言い方は悪いですが、出張ってでも、そういうところへ出させてもらって、みんなに少しでも知ってもらいたいというふうに思っております。今日は多くの「本」を持って来たんですけれども、いろいろな本がありまして皆さん上手に作ってくれるんですね。今回のテレビでもそうですけれども、僕たちがまともにやってもあんなふうに綺麗にビデオに出来ません。でもテレビだとこんなふうにビデオにしてくれるんですね。こういうのも皆さんにお伝えする時に良い資料になりますし、そんなことをこれからもやっていきたいというふうに思います。伝統工芸全般、農業が衰退し、地域が開発され、原材料になってくるものがどんどん入手が難しくなっています。全般的に本当に下降気味になってるのは致し方ないことだなと思うんですけれども、ただ本当にそれで良いのかなというふうに思いつつですね、出来る運動は今後も我々がやっていかないといけないと思っています。

環境万博と言われた愛知万博に出させて頂いた時に、持続可能性社会への学びということで、持続可能性って何だというのを随分考えさせてもらいました。紐解いてみると、江戸時代我々がやっていた仕事、そのものが循環。物を取って搾ってそれをろうそくにして、それを使って何もなくなっていく。実を取ってやらないと櫛の実はどんどん細っていくんですね。木の為に良くないんですよ。だから取ってやらないといけないんです。そういうことがひとつの循環なんです。そういうことを考えていくと、江戸時代はゴミが出なかった時代と言われてます。何でゴミが出なかったか。一回また本を読んで頂くと面白いんですけれども、そういう循環を学ぶチャンスは江戸時代にたくさんあったなというのを今感じています。そのままこの時代に戻そうという必要は無いんですけれども、その時代に学んだことをここへもう一回持ってきて、勉強し直すことは良いこ

となのかなというふうに思っています。我々もそんなことをこれからもしていきたいと思っています。本当はたくさんのものがあってみんな見せれないんですけども、万博の時の写真もあります、飛ばしていきます。地球市民村に出させて頂きました。4月に出たものですから世界の要人が色々来て下さって、我々の作品を見て、「日本は凄い、美術館みたいだって」。我々はこれ商売の生業なので、ここで美術館と言われても困るんですけども。今のはワンガリ・マータイさんと言って、南アフリカの環境大臣です。「もったいない運動」を起こしている。その方も我々のところへ来て頂いて誉めて頂いてる。これ「木」という字をワンガリさんが書いていったんですけども。この時は韓国のメンバーと一緒に出たんですけども、同じようなことを考えながら。ここには徳川さんにも一緒に出て頂いたりしましたが、そんな経験もさせて頂きました。



あと「SAMURAI」というのがあるんですが、今度後半の岡崎学の中で「地域を世界に発信」って安藤竜二さんっていう人がいるんですが、これは是非聞いてもらいたいんですけども。ビジネス形態随分変えた人間です。我々今東京の六本木のミッドタウンだとか日本橋のコレドだとか、原宿の表参道ヒルズだとかに和ろうそくを置かせてもらっています。我々がやろうと思っても出来ないです。でも出来ちゃう人間、そういう人脈っていうのがこの岡崎にあるんだなというのをそれで知りました。ここへ出たことで何が起こるか。若い人が和ろうそくを手取る事なんかなかったんです。今ここで和ろうそくをみんな買って行って灯すという

ことをしてくれるんですね。我々の出会わなかった人達とそういうところだから出会えるというのがあるんですね。そういうことをやっぱり我々もどんどんやっていかないと



いけないなというのを改めて今勉強させてもらっています。こんなキャラを使ってやっているんです。和ろうそくにはほど遠いですね。でも若い人にはこれで受け入れられるんです。これは六本木ミッドタウンの中のお店です。凄い高級志向のお店です。私もたまたま役割の中で今和ろうそくを作って、伝統工芸ということに考えるチャンスももらって、自分



のものを残していくということから、岡崎で何で和ろうそくがあるのかな。岡崎にどうやって残していくのかな。岡崎からどうやって発信していくのかな。そんなことをいっぱい勉強させて頂いているチャンスがあります。そのことを教えてくれる方々が岡崎の方々にいっぱい居るんですね。色々な知恵を持った方々が。岡崎だけじゃないです。愛知のくくり、日本のくくりの中で色々してくれる人が居ます。そんな人に言われたんです。地球の歴史46億年だよなって。それ1日にしたら人間の一生って知ってるって。0.000003秒だよって。「あ」って言えないじゃんっていう。そんな中で何が残せるのっていう。そういう言い方をされました。だから逆に言うと、何をやってもきりが無い。何をやっても間に合わない。だから一生懸命やりなさいという教えだったんですけども。これから我々がやっていけることが何があるか判りませんが、とりあえず人に手を合わせてお寺の本堂で正面に灯っているろうそくに対して、お年を召した方が手を合わせて南無阿弥陀仏と唱えて頂いてます。そんな人に手を合わせてもらえるものを作らせて頂いている。それがありがたいなというように思っています。あとは今日ここにご参加頂いた方々で、生活の中で如何にろうそくを灯してもらえるか。そんなことをしてもらえたら良いなあというようにお願いをしつつ、本当に駆け足になって申し訳ございません。もう少しまとめて本当にお話したかったんですけども欲張りすぎました。どうもありがとうございました。

出典 「日本のあかり」 片山光男 作